

## 平成 28 年度 アオコ情報 No. 6

7 月 12 日に実施した霞ヶ浦全域調査の結果についてお知らせします。

- アオコ現存量の目安となる色素（フィコシアニン）の濃度が高い地点は山王川沖と武田川沖で、それぞれ 720  $\mu\text{g/L}$ 、660  $\mu\text{g/L}$ （アオコレベル 3 相当）でした。
- 栄養塩の窒素及びりんは、土浦港、湖心、高浜沖、釜谷沖で、植物プランクトンの増殖に適した状況です。
- 気象庁の予報では、曇りの日が多いですが 25℃以上の日が続くため、アオコの発生が可能な環境です。ほとんどの地点でフィコシアニン濃度が上昇しているため、今後も警戒が必要です。

### 1 湖内のフィコシアニン<sup>※1</sup>濃度

- フィコシアニン濃度が高い地点は山王川沖及び武田川沖で、それぞれ 720  $\mu\text{g/L}$ 、660  $\mu\text{g/L}$ （アオコレベル<sup>※2</sup> 3 に相当）でした。湖心では低く、20  $\mu\text{g/L}$  でした。
- 昨年度の同時期（平成 27 年 7 月 15 日）と比べると、武田川沖は昨年度並みで、山王川沖は昨年度を上回っています。その他の地点では昨年度以下となっています（昨年度の湖心：180  $\mu\text{g/L}$ 、釜谷沖：220  $\mu\text{g/L}$ 、山王川沖：370  $\mu\text{g/L}$ 、武田川沖：680  $\mu\text{g/L}$ ）。
- フィコシアニン濃度が高い山王川沖及び武田川沖では、藍藻類のミクロスティス属やアナベナ属が多く、釜谷沖ではほとんどアナベナ属でした。

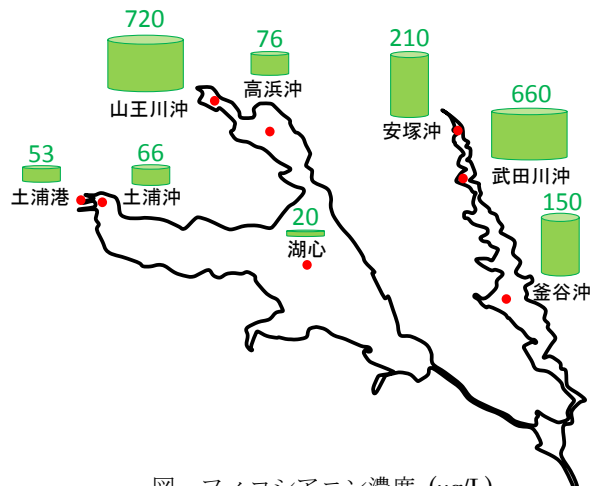


図 フィコシアニン濃度 ( $\mu\text{g/L}$ )



ミクロスティス属



アナベナ属

#### ※1 フィコシアニン

アオコの原因となる植物プランクトン（藍藻類）に含まれている色素です。フィコシアニン濃度はアオコの現存量と一定の相関があるため、アオコ現存量の目安になると考えられています。

#### ※2 アオコレベル

霞ヶ浦研究会によって、アオコの発生状況を視覚的に把握するための指標です（参考：国土交通省霞ヶ浦河川事務所 HP: <http://www.ktr.mlit.go.jp/kasumi/kasumi00313.html>）。当センターの報告（小日向ら、2012）より、フィコシアニンの濃度が 50  $\mu\text{g/L}$  程度のときをアオコレベル 1 相当、150  $\mu\text{g/L}$  程度のときをアオコレベル 2 相当、750  $\mu\text{g/L}$  程度のときをアオコレベル 3 相当、2300  $\mu\text{g/L}$  程度のときをアオコレベル 4 相当、32000  $\mu\text{g/L}$  程度のときをアオコレベル 5 相当としています。各レベルの写真は、別紙に掲載しています。

## 2 アオコ発生に影響する項目の湖内状況

- 調査時の水温は全地点で 26.6℃～29.7℃と、全地点でアオコの原因となるプランクトンの増殖に適した環境でした。
- 栄養塩濃度のうち、りん酸態りん濃度は土浦沖、安塚沖、武田川沖以外の地点で 0.01 mg/L 以上となり、アオコの原因となるプランクトンの増殖に適した環境でした。無機窒素濃度は土浦沖、山王川沖、武田川沖以外の地点で 0.1 mg/L 以上であり、これらの地点ではアオコの原因となるプランクトンの増殖に適した濃度でした。
- 気象庁（7月15日11時発表）によると、曇りや雨の日が続きますが、最高気温が 25℃を超える日が続くことから、引き続きアオコへの注意が必要です。

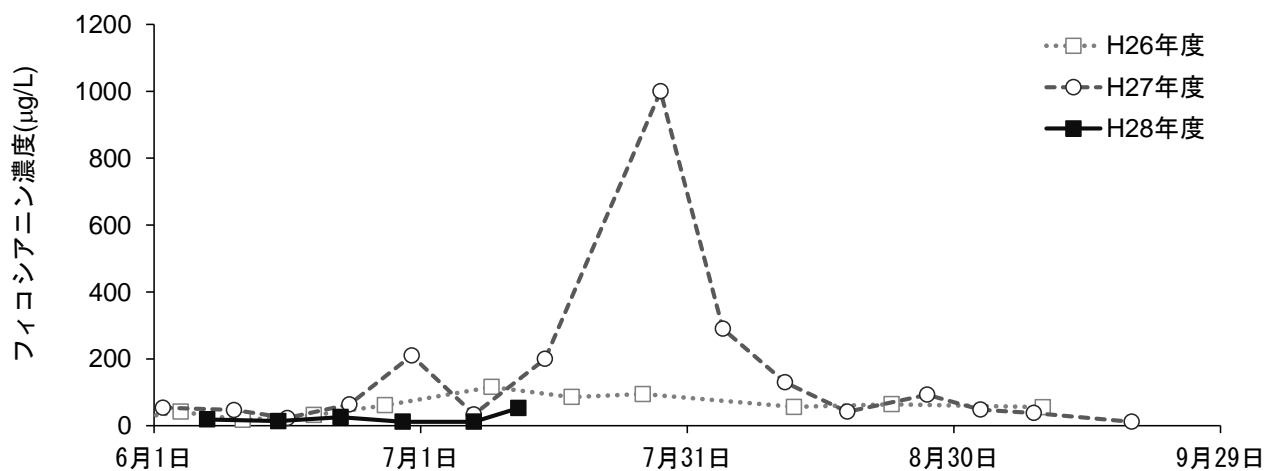
		西 浦					北 浦		
		土浦港	土浦沖	湖心	山王川沖	高浜沖	安塚沖	武田川沖	釜谷沖
水 温		A	A	A	A	A	A	A	A
栄養塩	りん酸態りん濃度	A	B	A	A	A	B	B	A
	無機窒素濃度	A	B	A	B	A	A	B	A
予報	日照時間	C							
	気 温	A							

A:発生に適した条件, B:発生が可能な条件, C:発生に適していない条件

(各項目の判定基準及び結果詳細は、別紙を参照)

## 3 土浦港のフィコシアニン濃度の推移

- 平成 26 年度、27 年度と本年の土浦港の値を比べると、土浦港では昨年度を下回っています。



### 【お問い合わせ先】

茨城県霞ヶ浦環境科学センター

担当：湖沼環境研究室

TEL 029(828)0963

FAX 029(828)0968

( 別 紙 )

● 各項目の判定基準

【水温】

アオコの原因となる植物プランクトン（ミクロキスティス）の増殖倍率がおおよそ 20℃以上から高まり、25℃以上で約 10 倍に達する（佐々木，1975）ことから、「25℃以上」をA、「20℃以上」をB、「20℃未満」をCとした。

【栄養塩濃度（りん酸）】

植物プランクトンの栄養源となるりん酸について、藍藻類の増殖に関する目安が 0.01mg/L といわれている（Oliver ら，2000）ことから、PO<sub>4</sub>-P 濃度が「0.01mg/L 以上」をA、「0.01mg/L 未満」をBとした。なお、本項目の基準については、Cに該当する知見が不十分なため、A、Bの二区分とした。

【栄養塩濃度（溶存無機窒素）】

植物プランクトンの栄養源となる溶存無機窒素について、藍藻類の増殖に関する目安が 0.1 mg/L といわれている（Oliver ら，2000）ことから、溶存無機窒素濃度が「0.1 mg/L 以上」をA、「0.1 mg/L 未満」をBとした。なお、本項目の基準については、Cに該当する知見が不十分なため、A、Bの二区分とした。

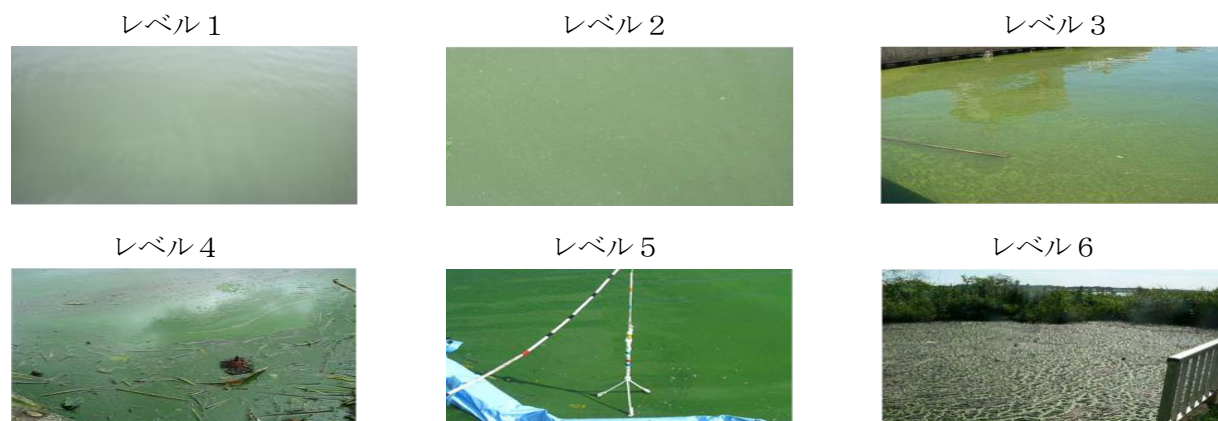
【日照時間】

気象庁の天気予報（茨城県）において、1週間「晴れが続く」場合をA、「晴れと曇りが混在している」場合をB、「曇りや雨が続く」場合をCとした。

【最高気温】

過去の最高気温と水温の関係は、水温が 25℃、20℃になったときの一週間の最高気温の平均がそれぞれ 25℃、18℃だったので、一週間の最高気温の平均値が「25℃以上」をA、「18℃以上」をB、「18℃未満」をCとした。

【アオコレベル】



● 調査結果の詳細

	西 浦					北 浦		
	土浦港	土浦沖	湖 心	山王川沖	高浜沖	安塚沖	武田川沖	釜谷沖
採水時刻	7月12日	7月12日	7月12日	7月12日	7月12日	7月12日	7月12日	7月12日
	11:12	11:03	10:33	12:53	12:40	9:02	9:20	9:36
水温(°C)	29.7	28.5	26.8	29.2	27.8	27.4	27.7	26.6
フィコシアニン (µg/L)	53	66	20	720	76	210	660	200
全窒素 (mg/L)	2.2	1.1	0.70	1.7	1.2	3.6	2.0	1.0
全りん (mg/L)	0.19	0.13	0.096	0.20	0.17	0.16	0.18	0.12
NO <sub>3</sub> -N (mg/L)	0.33	<0.01	0.03	<0.01	0.24	2.1	<0.01	0.07
NO <sub>2</sub> -N (mg/L)	0.03	<0.01	0.04	<0.01	0.04	0.06	<0.01	0.05
NH <sub>4</sub> -N (mg/L)	0.04	0.03	0.05	0.04	0.15	0.03	0.03	0.11
PO <sub>4</sub> -P (mg/L)	0.02	<0.01	0.03	0.02	0.04	<0.01	<0.01	0.05

※土浦港のフィコシアニン濃度は、フィコシアニン以外の色素の影響で濃度がわずかに過剰評価されているが、微量であるため無視した。